

カナダの学生夫婦 ただいま研究中

障害あるサル 集団の中でどう共生？



観察、研究の合間に子サルと遊ぶサラさん、デーモン君、右は先生役の延原さん

洲本市畑田の「淡路島モンキーセンター」で、カナダから来た学生夫婦が、手足に障害を持つサルの研究をしている。こうしたサルが親子、兄弟、集団の中でどのように行動し、健全なサルたちとどう共生しているのか。そこから人間社会のあるべき姿を見つければ、とこのヒントを得たい、というのがテーマである。センターでは家を二軒提供し、延原利和所長が指導に当たるなど、遠来の研究者にこたえている。

淡路島モンキーセンター

人間社会のヒントに



手に障害を持つ子サルもいずれも洲本市畑田の淡路島モンキーセンターで

この学生夫婦はカナダ・バンクーバーのシモン・フレイザー大学四年生、サラ・ターナーさん(三三)とデーモン・マシューズ君(三三)。二人は四月下旬に来日、まず甲南大学文学部人間科学科の谷口文章教授のゼミ生として学んだ後、五月十七日にセンターへやって来た。目的はサラさんの卒業論文。サラさんは女性、障害者、原住民族、病氣療養者といった、弱い立場の人たちを一般社会がどう受け入れ、共生していくべきかを学んできた。卒論を書くに当たって、大学教授の母親

からある助言を得た。「淡路島のモンキーセンターには手足に障害を持つサルが多くいるが、群れはみんな仲良く暮らしている。人間社会を考えるうえでなにかヒントにならないか」と。母親は谷口教授と友人同士で、センターのサルを二十年来研究している同教授とともに昨年センターを訪ねていたからだ。

センターには現在二百五十四近いサルがいる、このうち、両手、あるいは両足首から先がない重度から、指が一、二本ない軽度のもので障害を持つのが三十四匹いる。ことしも十四の子サルが生まれたが、三匹に障害がある。えさの関係かどうかは解明されていないが、しかし、「集団生活はきわめてうまくいっており、いずれも性格はおとなしい」(延原所長)。

サラさんらは、延原さんからまず研究の基本となるサルの家系図を学び、いずれも十三歳の、重度、軽度、健常のメスサルを重点に行動の観察を続けている。しかし、研究期間が五月二十六日までの一回目と六月七日から二十一日までの二回で短いこと。サルたち

の行動半徑は広く、いまの時期はヤマモモをめざして山深く入り込んでいるなど、なかなか思うようにはいかないようで「帰国の七月初めまで時間が迫っておわり、焦ります」とサラさん。先生役の延原さんはなにかと助言しているが、言葉の壁に窮することもあ

る。「それでも多くのサルの名前も覚え、サルたちもサラさんに近寄ってくる。いい研究、観察をして帰ってくるのには」と温かく見守っている。